

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

バティックで挑む「地方創生」

辻修次 (マレーシア大学クランタン校文化遺産学科上級講師)



バティック・フェスティバルに出品されたバティック製のマレー風 (筆者撮影)

繁栄する首都圏と、所得の低迷や若者の流出に悩む地方。このままでは取り残されるという危機感。元気がない地元の特産品をなんとか復活させられないかという思い。どれも日本に限った話ではない。むしろ、「地方創生」は 21 世紀のアジア共通の大きな課題となっている。今クランタン州が

取り組もうとしているバティック再生もその一つである。

筆者が住むクランタン州は、マレーシアバティックの本場といわれている。だが、当地の状況は決して明るいものではない。地元大学主催のバティック・フェスティバルにおいてすら、「バティックの死」というシンポジウムの開催が検討されたほどだ。

危機の原因は、ライフスタイルの欧米化と、安価な中国製品の大々的な流入だといわれている。これらは、バティックに限らず、東南アジア地域の工芸品、軽工業製品が広く直面している問題点でもある。では、クランタンのバティックはいかにして生き残りを模索しているのだろうか。その答えとして語られるのは、マレーシアの強みである英語圏とのネットワーク構築能力を生かし、海外のファッション市場に活路を見出すことである。事実、意匠や素材にストーリーを与えてブランド化した製品や、バティック素材を用いた靴などを「一点もの」としてロンドンやシンガポールのバイヤーに売り込むことで、大きな成功を収める業者も現れはじめています。これは、インドネシア・ジャワ島の主要産地で取られている振興策とは異なるアプローチである。インドネシアでは、学校や公務員の制服に地場のバティックを採用するなど、内需でバティック

産業を支えることが基本方針となっている。だが、インドネシアに比べ、相対的に内需の規模が小さいマレーシアの場合、英語圏との交渉力を活かし、輸出に活路を見出すことが優先されている。こんなところにも、両国の持つ相対的な強みが反映されてくるのはなかなか面白い。

さて、クランタンのバティックを揺るがす原因として、もう一つ見落とせないのは、インドネシア政府が、国連教育科学文化機関(ユネスコ)にバティックを自国固有の無形文化遺産として登録し、さらに多くの伝統的な意匠に知財権を設定した影響である。マレーシア国内では著名なクランタンのバティックも、実際のところは、20 世紀の初頭にジャワの染色技術を導入して開花した産業にすぎない。当地の染色家ですら、本音ではクランタンの意匠は数世紀の蓄積のあるジャワの流用に過ぎないと白旗を挙げざるを得ないのが実情である。それゆえ、新たに浮上した知財権の問題によって、クランタンのバティック産業は、否が応でも新しいモチーフの模索を迫られる格好となっている。

こうしてみると、クランタンのバティックは、二つの「創生」に向けた挑戦を迫られているように思える。一つは、冒頭にも挙げた日本で用いられる意味の「地方創生」。すなわち、グローバル化や中国製品の流入といった条件の下で、相対的に不利な経済的地位に置かれた地方における地場産業の振興である。そして、もう一つ見落とせないのは、インドネシア・マレーシアを包摂する文化圏における「創生」である。ジャワに由来する文化が、歴史的には文化的周縁に位置してきたクランタンにおいて独自に現代化し、開花することができるのか。それは西欧美術史における北方ルネサンスのように、クランタン・ルネサンスを胎動させようのかという文化史的な挑戦でもある。

< 執筆者プロフィール >

上智大学文学部卒。マラヤ大学 Ph.D (東南アジア研究)。在パラオ日本大使館専門調査員、国立文化財機構アソシエイト・フェローなどを経て現職。マレー半島東海岸(クランタン州・トレンガヌ州)をフィールドに、コミュニティに立脚した自然遺産・無形文化遺産保護のあり方を研究している。